かつしか 水紀行

～中川 七曲がり～

平成２３年 ８月 １日

かつしか ＰＰクラブ

かつしか 水紀行

～中川 七曲がり～

Ⅰ．枕詞のかつしか　・・・・・・・２

Ⅱ．木下川薬師界隈　・・・・・・・３～４

Ⅲ．さだまさしの青春　・・・・・・４

Ⅳ．川辺の風景　　・・・・・・・・５～７

Ⅴ．狸とエイ　　・・・・・・・・・７

Ⅵ．葛飾に光あり　・・・・・・・・８

表紙の写真

昭和 30 年代まで、年中行事として新年早々、本奥戸橋の下で寒中水泳が行なわれていたが、川の汚れが進み中止となった。

橋の歩道脇には、飛び込み、抜き手、旗振り、姿のレリーフが川の歴史を語る。蛇行する中川畔からの東京スカイツリーは、右に左に位置を変える。周辺の工場跡地にはマンションが立ち並び、住環境も大きく変った。巻末は平和橋を象徴するハトのレリーフ。

撮影年月日　平成 23 年 5 月 22 日

文 と 写真　小　池　和　榮

Ⅰ．枕詞のかつしか

身びいきではあるが、「葛飾」の名は23区の中でも雅（みやび）である。「青丹（あおに）よし」は奈良、「八雲立つ」は出雲、「鳰鳥（におどり）の」が葛飾の枕詞である。

もっとも、葛飾は今のエリアだけでなく、隅田川以東の東葛飾郡（千葉）や、北葛飾郡（埼玉）をも含む広大な地域の総称である。

鳰鳥とは、「かいつぶり」のことである。

水に潜ることを得意とし、「潜（かず）く」姿からと言われている。

葛飾は、低地の入海で水鳥が棲みやすい、水清らかな場所であったことは間違いない。

（かいつぶり）

＊保育社 野鳥の図鑑より

区の中央を流れる中川の源流は、埼玉県羽生市の利根川より発する島川に至る。

中川の歴史はそれほど古くはない。昔は、区内の水元猿町以北を古利根川、以南を中川と言ったらしい。

地図で見ても、中川は「七曲がり」「八曲がり」、或いは「九十九曲がり」と呼ばれるが、江戸時代の人工川（放水路）だからである。

享保 14 年（1729）、流域の水害に頭を痛めた徳川幕府は、勘定吟味役の沢井某に、開削工事を命じた。

工費圧縮と工期短縮を優先し、「池」や「沼」を次々と繋いだ結果、蛇行したと言われている。

名前の起こりは、太日川（江戸川）と隅田川の間に在るから、とも言われるが定かではない。

（天にのびる流麗なハープ橋）

かつての中川は、現在の荒川を縦断し、江東、江戸川両区の境として、小松川で荒川に併呑された。今の中川は、首都圏の動脈である、高速道路中央環状線「かつしかハープ橋」の下で綾瀬川と合流し、更に約８㌔下り、西葛西で荒川となって東京湾に注いでいる。

Ⅱ．木下川薬師界隈

中川と綾瀬川が合流する近くに、木下川（きねがわ）薬師がある。正式な名称は、青龍山薬王院浄光寺と云い、天台宗の古刹である。かつて 3000 坪の敷地に七堂伽藍を有し、山門を護る 2 体の仁王像はいずれも 3㍍近くあり、寛文 3 年（1663）仏師順慶の作である。

創建は嘉祥 2 年（849）に遡り、浅草寺の末寺の筆頭にあった。

秘仏の本尊薬師如来は、伝教大師の作とされている。

天正 15 年（1591）
徳川家の祈祷所として、
5 石の供養料を受け、
今も病気平癒の信仰を
集めている。

（緑に囲まれた山門）

木下川の地名は、本来、「木下川薬師」に由来し、「木下川」が正式と思われるが、学校や地域の公共施設は「木根川」を使用している。同じ例は、区内の「青砥」も青砥藤綱にゆかりの地でありながら、住居表示は「青戸」を使用している。日常生活の上で平易にし、誤読を避ける工夫であろう。

Ⅲ. さだまさしの青春

木下川薬師に隣接する区立中川中学校は、戦後開校した新しい学校である。「関白宣言」などでヒットを飛ばした、さだまさしさん（59）の母校であることは、あまり知られていない。

「精霊流し」など、さださんは長崎県出身のイメージが強い。
しかし、昭和 40 年（1965）ヴァイオリン修行のため、単身で上京し同校に通いながら、高名な演奏家に師事していた。

多感な青春の一時期を、中川のほとりで過ごした。
さださんのアルバム「夢供養」のナンバーにも、「木根川橋」があり、エッセーでも思い出を語っている。
本人に会ったことは無いが、気さくなイメージと人柄は、葛飾の水によるものだろうか。

Ⅳ. 川辺の風景

その昔、中川は清流で知られ、豊かな水源を利用し、流域には三菱製紙、三菱ガス化学（三菱江戸川化学）、東京タングステン（アライドマテリアル）、東洋インキ、日本紙業（日本大昭和板紙）など大手の主力工場や、町工場、染色業者が軒を並べていた。

高度経済成長を挟んで、環境問題や設備投資の拡充から、工場は地方や海外に移転、現存は森永乳業の奥戸工場くらいである。

町工場も、産業構造の変化で転廃業を迫られ、跡地の多くは文字通り、リバーサイド・マンションに変貌した。

（マンションに変貌した工場跡地）

本奥戸橋と平和橋の右岸にある「東立石緑地公園」も、以前は武田製薬の子会社の工場であった。

平成 20 年に、防災公園として新しくスタートした。

かつしかＰＰクラブのメンバーと、同公園を訪れたのは、梅雨入りを目前にした、5 月末の日曜日であった。起伏に富み、広さは約 24 万平方㍍と圧倒される広さに比べ、植栽の木々はまだ若く頼りなげである。

立石駅近くに住み、この公園まで散歩を日課とする 80 代の男性は「この土地は化学物質に汚染されていて、住宅には適さず、防災公園となった」と話してくれた。

当初公園から、対岸の奥戸まで、避難橋を架ける計画だったが、費用面で断念し、有事に際し川辺に船を着け、移送する方法に切替えたと語った。

確かに中川両岸は、「塀」を建てたような、高いコンクリートの護岸で固められている。

（公園ののどかな親子時間）

土手と外側の道路の間にはフェンスが張られ、人がすれ違うのも難しい場所さえある。

下流に行くほどこの傾向は強く、土手の拡幅が困難な平和橋から上平井橋の両岸は、耐震補強の一環として水上に「遊歩道」を設けている。

平時はプロムナードとして、災害時は一時避難場所となり、物資輸送船舶の接岸を想定している。

（水上のプロムナード）

（川沿いに残る大地震のつめ跡）

同じ地点の右岸に目を転ずれば、東日本大地震で生じた「地割れ」の跡が生々しい。

身近な場所での被害を目のあたりにすると、記憶が鮮明なだけに、改めて規模の巨大さを実感し、万一の備えの必要性を痛感する。

V. 狸とエイ

前述の老人は「最近夜になると、この公園に狸が出没する」と話した。葛飾で狸？と信じがたいこちらの顔を見取ったか、多くの人が目撃していると重ねた。老人は見るからに実直そうで、嘘をつく顔でもない。本当なら、野生動物が棲める環境が戻ってきた証拠だろう。

あたりでは、釣り人が川面に向けリール竿を何本も仕掛けていた。何を狙っているのか尋ねると「鯉」だという。

先日、八剣橋で溯上する、1㍍位の褐色の「エイ」の親子を観た話をすると、「別に珍しくはないよ。夜この辺で鰻を狙っていると、よく引っ掛かるよ」との返事に、こちらが驚いた。

半信半疑であったがやはり、あれは「エイ」だったのだと確信した。以前、「エイ」を沖縄で見たせいか、青い海を悠然と泳ぐイメージが強い。東京湾でも驚くのに、きれいになったとは言え、海から 10㌔近く離れた真水の中川である。

VI. 葛飾に光あり

防災対策の一環である東立石緑地公園や、整備が進む中川堤は、ちょうど、真っ白いクローバー（詰め草）の花が満開であった。

熱心に草を掻き分けている女性に尋ねると、手にした「四つ葉のクローバー」を何本か見せてくれた。

（発見のポイントは時間を気にせず根気よく）

その中の１本をプレゼントしくれると言う。せっかく採ったのだからと遠慮したが、なおも下さると言う。

今さら四つ葉のクローバーでもあるまい。そう思いつつ有難く頂いたが、今のところまだ、わが身にその効果はない。

これまで、「下町」とか「川の手」と呼ばれる葛飾ではあったが、下水道の普及と工場の移転で、中川は蘇り、街は変わった。

都内でありながら川辺を「エイ」が泳ぎ、岸辺の公園には「狸」が顔を出す環境は嬉しい。よく考えると、四つ葉のクローバーの効果は、私個人にではなく、明日の葛飾に対する「吉兆」ではないだろうか。